
Chase Dream

苑流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Chase Dream

【NZコード】

NZ647D

【作者名】

苑流

【あらすじ】

それは突然やってきた。アルルたちに訪れる惨劇と挑戦。それに立ち向かう仲間たち。死にゆく者、生きる者、サバイバル戦の結果はいかに・・・？

プロローグ（前書き）

この物語は魔導小説の『ふよふよ』を題材に製作しております。内容は自作ですが、キャラ名は引用しております。一度はキャラ画像を公式サイト等で見ていただければ、内容がより一層わかりやすくなるかもしれません。

基本、話の展開は早いですが気にしないでください（笑）

プロローグ

一つの力を得るために、人々は善悪問わず行動してきた。

ある者は戦いに敗れ、ある者は人質になり、また別の場所の者は地味な努力を重ねる。

そういう時代もあった。だが今は違う。手段を選ばず行動することに不信感や罪悪感を覚えた人々は破壊活動を止め、

だれもが住める国にしようとして、国を変えた。その変わった街の一つ、『スカイサービスシティ』に、一人の少女がいた。

彼女の名は、アルル・ナジヤ。

プロローグ（後書き）

http://homepages3.nify.com/yuu
shakaz.kaz.htm
こちらが本家です。どうぞよろしく。

第1話・始まりの時

やあ、みんな。ボクの名前はアルル・ナジャ。魔導学校6年生で二才！

魔導学校っていうのは、簡単に言えば魔法を使える人たちが集まるところさ。

ボクもその一人。この世界は全員がってわけでもないけど半分ぐらいの人人が魔法の力、すなわち魔力を持っているの。

超能力とは違つてそれぞれ違う魔力を持つているんだ。先生は昔、大きな力が解き放たれたから今ボクたちが魔力を持つていると

いつていたけど詳細はわからない…。まあ誇りに思うべきなのかな。そういうわけで、今日も毎日と変わらない日々を送り続けている。

今ボクは平らに続くアスファルトの道を通りながら登校中だ。

「よつー！」

後ろからポンと肩を叩いたのは同じクラスのシェゾという少年だ。変わっているのは名前だけじゃなく、

容姿や性格も大分変わっている。勿論、変態的な意味でね。彼のことをもう少し詳しく話すと…

本名シェゾ・ウェイグレイ。別名『変態魔導師』。銀の髪に青い瞳。剣を扱う魔導師。シエゾの紹介は以上！

「ん？今オレのことなんか言つた？」

紹介したのだからやうどあらう。とは言わないが…

「まあいい。それより聞いたかよ？昨日のニュース。

あいにく昨日と限定されてもパツとは出でこなこれ。

「また街一つなくなつたみたいだぜ」

ああ、最近聞いていた氣がするね。魔導師が集つ街が一晩で消されてゐるとか。死者はいないみたいだけど。

「それがさ、昨日消された街は隣のチコベンタウンだつてよ。」「

「隣かあ…ボクらの街にも来ちゃうのかな？」

「來てもオレが阻止するぜーまあこないに越したことないけどー。」

偉く強気だね……。実力はボクと同じくらいなのに……。

「うう、うるさいーまあ先生もいるから大丈夫さ。」

今度は弱気な……。学校登校中に男女一人が並んで歩いているととてもなく誤解されそうだけど、決してそのようなことはないからね！

読者のみなさん、わかつてください！

とはいって、やつぱり誤解されるよねえ。今度からショゾグきたら逃げようかな。

「それって、俺がストーカーみたいになっちゃうじゃないか！」

だって事実そうだし……。なにかある度に『お前が欲しい』という人がストーカーや変態でない理屈はないはず……

「いや、だからな。それはお前の……。」

あ、学校についた。

「逃げるなああ！！」

僕はとりあえずショゾを置いていく形で教室へ向かった。

僕らの使う教室は今の日本の学校の教室の広さではなく、入れて二十人ぐらい。

一クラスの人数も十人程度だからそのくらいの広さで済むんだ。入り口はちゃんと一つあるんだけどね。

僕はその後ろのドアから教室に入った。教室につくと数名が集まつて何やら話をしていた。

「え～ホント～？」

小さくて可愛らじい声を出しているのはマーちゃんだ。本名はマーチだからマーちゃん。

「」の使い手でいつも陽気な性格。一緒にいるだけでも楽しげだ。

「あら、アルル。あなたもきなさい。」

女王のような声をだしてきたのはルルー。青い長い髪に青い瞳。言葉遣いは女王のようである。

なぜ……と思うかもしないが、彼女の実力はだれもが認めてしまうのさ。

「紹介なんていいのよーとにかく昨日のことよーあなたはどう思つてこるの?ー」

「え、昨日のー」とつて何?..

別にシラを切つているわけじゃなく、僕は本当になんのことを言つているのかわからなかつた。

「もう!ホント鈍感ね!私がよくお出かけにいつて遊んだりもしたチコベンタウンがなくなつたことよー」

なぜ十一歳が隣街まで足を運ぶのかといつ質問は避けてあこつ。後が怖い…。

「もしかしたら次は私達の街にくるかもしないのよ?..」

「来て欲しくはないけど、來たらシェゾが倒してくれるらしいよ。先生もいるから大丈夫かなあつて。」

セツキショゾグが言つていたことがふと頭によぎつた。まあもとから当てにはしてないけど……。一方でショゾグは得意気な顔をしているがそこに重い一撃。

「変態魔導師には期待しないわ。」

みんなが頷く。この上なく落ち込むショゾグ。残念だけどボクもみんなに賛成するよ。

「でも、他の街も多少なりと学校はあるはず。その先生の力で抑えられなかつたんだから……。来て欲しくないよね。」

「ぐく普通の意見を述べたのはウイッチ。日本訳だと魔女だけど……。黄色い髪で杖を持つ少女。性格はかなりシックロイけど……。」

「あれ? 先生は抑制しようとしたのに死者はないの?」

ふと自然な疑問を僕は言った。

「氣絶つことで死んではいないなのよね。重症つてわけでもないみたいだし……ま、来ないに越したことはないですね。」

意見と解答自分流でまとめたのはやはり、ルルー。まあいいけどさ。区切りのいい所でお馴染みのチャイムが鳴った。

一時限目開始の合図だ。みんなが席につく。このクラスは女の子六人、男の子三人の九人という少人数クラスだ。

この学校自体、女の子の人数が多いので、この人数差はしょうがないといえばしようがない。それぞれの名前を挙げると、

まずは女の子から女王のルルー、魔女のウイッチ、弓使いのアーチャン、妖精のチコ、人魚のセリリと特に属性のないボク。

男子は変態のシェゾ、同じく変態動物のラグナス、そして笛吹きのパノッティ。みんな六年間同じクラスだ。

僕らの学年は一クラスしかないんだもの。みんなが席についてから数分後に先生が教室の前方のドアを静かに開けて入ってきた。

名前はヨージ先生。男の先生でちょっと日本人っぽい名前だけど、気にしない！

「授業を始める前に少し違う話題から入るうか。」

なんとなくみんなは予想がついていた。何せ、授業前から話題になっていたのだから。

でもよく先生もみんなも知っているよね。そんなに有名だったのかな。

「みんなもご存知の通り、昨日一日で、隣街がなくなってしまった。本当はみんなを学校に連れてくるのは危ないのだけれども、

みんな親がそばにいないから学校のほうが安全だと判断した結果、しばらく学校に留まるかもしないが、その辺は我慢してくれ。」

そう、ここにいる八人は親がないのだ。唯一いふといえばウイッチであるが、彼女の母ウイッシュも行方不明だし、

ボクは親さえ知らない。唯一身内のことについているのは、お兄ちゃんがいること。

けどボクが物心つく前に家からいなくなってしまい、名前も顔も覚えていないんだ。

「街を消しているのは同一犯のようだ。少しでも不審な人を見つけたら無理をせずにすぐに助けを求めてくれ。」

特にルルーとシェゾ、君らが一番危ないから念押ししておぐべ。」

「わっ、私は大丈夫よ?！」

「俺もそんなことはしないぞ?！」

実に説得力のない言葉ではあるが、しょうがないか。

「みんなもいいな？」

「はーい。」

みんなも同じことを思っていたらしい。まあそのようなことがあつたとしても、すぐに逃げるだらうけどね。

さてさて、こいつの授業の多くは魔導に関する授業だ。午前二時間午後一時間の計五時間。

魔導中心の授業構成だとうんざつしそうだが、それでもなく実技、筆記もある。

また体育といつ名田の授業もあり、生徒同士の対戦や、校外授業といったこともやるんだ。

けどそれだけじゃやつぱり馬鹿になる一方だから、数学や国語の授業や試験もある。

僕はといえば、試験や実技などは並になせている方の生徒だとほ思ひけどね。

まあ成績もそのぐらいだしねー。今日の時間割といえば数学、国語、魔導講座、体育、体育。感想的には普通だけどね。

まあみんな僕と同じような感覚はもつていらないらしい、シエゾヤル
ルーは必習科目になればすぐに寝てはおじわれるの繰り返し。

シエゾに関しては体育以外動いているのを見たことがない気がする
…。体育の成績は学年トップだけど…。

「わーい。」

ふと一息。今は三限目が終わってお昼タイムに入ったところ。弁当
持参と学校支給の一通りの昼食があるけど、僕らはたいてい後者の
方を選ぶ。

「んと…今日のメニューは…。」

ずりっと並ぶメニューをみているうちシエゾが介入してきた。

「アルル、一緒に食べよう。」

シエゾじゃなければ素直に喜べたが、なにかもどかしい…。

「食つやつがないんだ。なつ？」

そんな同意を求められても…。なにか友達がいないともとれるし、仕方ないから僕といつぶつともとれる。まあいつか。

「よし、じゃあ席とつて待つているぜ。」

両手に持つオボンの上に特盛りのカレーライスを持ちながらシェゾは席をとりにいった。ん~じゃあ僕もカレーにするかな。

全く今日の朝からなんでシェゾと一緒に光景が多いのだろうか。まるで本当に誤解されそうだよ…。

そんなことを頭の隅に置きながら、中辛のカレーを僕はパクパク食べていた。

そういうえばカレーが好きになつたのは幼稚園の時ぐらいだつたかなあ…。

今家にいるカーラーくん（カーバンクル）もカレーが好きになつたのはその頃だし…。

あの時はお兄ちゃんがカレー作っていたんだつけ。僕は手伝いをしていたつけな…。なんかドジ踏んでばっかりだつたけどなあ…。

そんなことを考へていてるうちに他の声が介入してきた。

「どうしたアルル？浮かない顔してるぞ。」

顔に自分の考へていろ」とが出ていたみたいだ。

「うふ、ちゅうと考え事をね……。」

「兄貴のひとか?」

昔からの付き合いだけあって白銀の髪の持ち主の勘は鋭かった。

「カレーのことで少し想い出していたんだ。でも……あれほど好きだったお兄ちゃんがなんで家をでて行ったのか……。今もわからないんだよね。」

「理由もなく妹を見捨てるとは思わないな……。」

ショゾは掛けた言葉を必死に探していたが、これが精一杯であった。

「うめんね。こんな話して……。」

「いや、いいや。それよりカレー食おつか、カレー。」

第2話・見えないもの

昼食を食べ終わった僕らは体育の準備をしに教室へ向かった。着替える場所は教室ではなく、

男女別の更衣室。体操着は男の子は白の半ズボンに白の半袖。女の子は半ズボンより短めの黒ズボンに上は同じ。

一年中同じ格好だから冬が寒すぎるんだよね。

「シェゾ、覗くなよ。」

僕は一番危ない生徒に毎回言いつヤリフを言って更衣室へと向かった。女の子の更衣室といえば、

なぜか男の子が入ったがるけど、そんな興味をひくものあるかなあ？ロッカー式だし……。

(いや、着替えていふといふをね。)

それってただの変態じゃ……そんなにみたいなールルーとかならしてくれただけど。

(ルルーじゃなあ……。)

全国のルルーファンに申し訳ない言い方だよ、それ…。

(か弱き子…)

ロココンかい！作者は…

(誤解を招くことを諒りとじやない！か弱き子セー…)

はいはい、か弱き子ね、か弱き子。全く…。

か弱き子でない僕は早めに着替えてグラウンドに向かった。今日の体育の授業はどうやら体力測定みたい。

幅飛びとか握力とかありきたりなのと、プラスアルファーで魔力測定とかとか。これも至って僕は標準値だけね。

「今日は体力測定かあ…。」

ニヤニヤしながら言葉が浮いてるのはシェゾ。体育が得意だけに自信満々だ。ああ、疲れるなあ…。

とまあ、ショゾが学校新記録だしたり、ルルーが抗議したり、セリリがなかなか始めなかつたりでなかなか大変な体力測定だった。

中でもアーチャンなんか学年が一つ下なだけあつてもつと面倒見が大変で…。アーチャンは五年生だけど学年で一人しかいなから六年生の僕らと混ざつているのさ。頭は僕よりいいのがなんともいえないけど……。

「ああ、授業が終わつたらみんな少し残つてくれ。」

ゴージ先生がそう言葉を残した。なにかするのだろうか？

「うん、まあちょっとホームルーム的なことかな。」

なるほど。気になるつていえば気になるなあ…。

「俺凄かつたる?」

空氣の読めない変態が介入してきた。

「そりだね。」

空返事で答えたのがよくなかったらしく、空氣の読めない彼がさりに会話を続ける。

「なんといつてもこのショゾ様に体力面で勝て……。」

ふつ、馬鹿はほつておいて着替えるとするか。

放課後、クラスのみんなは自分たちの教室に戻り、先生を待った。

「ホームルームってなんだらう?」

確かに気になるよね。アーチャさんが聞くんだから僕も疑問に思つてもいいだろつ…。

「ホームルームつてのは先生が生徒を集めて伝えたいことを囁き授業や。」

ああ…今日は変態が絶好調のようだ。みんなは無視の方向へしい。

「街消滅と関係があるんじゃない?」

なるほど。それが一番あり得そつかな。

「全くだ。」

僕らの輪の外から聞こえた声はユージ先生。この人は本当に気配がないなあ…。

「全くもってその通りだ。詳しく述べ、事態の收拾がつくまで学校に留まるという方針になつた。

「どうしても家に戻りたいやつは明日以降先生にいつてくれ。みんなでついていくからな。」

ある意味嫌だけどしようがないか…。ルルー女王の家も見てみたい気がする。

「とりあえずホームルームは以上である。」

一分もたつていないような…。

とまあそんなこんなで学校に留まるとになつたわけだが…。じつはう時にどのようなことをすればいいのかさっぱりわからない。

「よし、なにをしよう。」

「遊び。」

「散歩。」

「いじめ。」

「スカートめぐり。」

色々とまあ意見が…。白髪の剣士はルルーの鉄拳をくらっていたけど。

「アルル、あなたはなにがいいの?」

うーん、散歩あたりがベストなんじゃないかな。

「じゃあ、それこしましょ。」

あ…あれ？僕の意見でいいの？って、みんなの意見聞いた意味ない
じゃないか！

とこうわけで、みんなで散歩することになった。唐突過ぎるけどね。
・・。

「やっぱ外が一番ですね。」

杖に乗つて楽しんでいるウイッチがより楽しそうに言った。僕に任せたくせに呑気な…。

まあ、それはそれでしあうがないかな。けどウイッチ。ひとつだけいい？と、ここで僕の思いを伝えてみる。それは・・・、

『歩けよ。杖に乗つてないでさ。ただでさえ疲れるのに・・・。』

とこうことを願つてはみだが、むなしくも叶わず、以後、彼女が杖

から降りるところ」とはなかった。これで太らないところのが、

ちょつと全国の女性を敵に回しそうな事なんだけど……。

「あへ、あれな～に～？」

「」のところの発言がなかつた、一個下の彼女が口を開いた。そして声を出すと共に、ある方向に指をやじついた。

みんな、アーチャーさんが指差すほうを見る。そこにせ・・・、うん？ よくみえないけど・・・。あれは何だらう？

なにかキラキラしている棒状のものが落ちている。近づいてみると、それは単なる笛であつた。

「なんで不用意に笛なんか落ちているのかしらね？」

確かに。まあ誰かの落し物なのかな。そつ考えれば納得はいくけどね。

「なにか彫つてありますわ。」

ウイッチが笛になにか文字が彫られていることに気づいた。

その大きさは読み取れる範囲の文字だった。

「てい・・・、てい・・・る・・・といひひひひひ抜けていて読めないわ。」

ルルーが必死に解読しようとすると、それ以上は読めなかつた。でも一体なんでこの学校内に笛が落ちているんだろう？

学校関係者や生徒達の中で『ティ』という文字が連なつている人なんていないし・・・

ましてや、学校関係者以外は立ち入り禁止なのになんで校内に関係のない人のものが落ちていいのだろう？

「ま、悩んでも仕方ない事ですわ。」

ウイッチがこの場の空気を初めに割いた。

「そうね、でも、落とし主が落としたことに気が付けばこの学校に取りに来るかもしませんしね。

「いはひとまず、預かっておきましょ。」

ルルーがまとめた・・・かに思えたが、勘の鋭いこの子がまた言

つた。

「あ、あそこにだれかいるう。」

またまた指をさしながらアーチャンは言った。この子は本当に鋭い
なあ・・・アーチャンが示す方向には確かに人影があった。

しかし、遠くてだれなのかはわからない。

よくよく考えてみれば、この校舎内に隠れるようにして僕らを見て
いる人がいたら、それはとても怪しい人なんじゃないかな・・・。

そんなことは後で気づくことになるのだが、その時の僕らはみんな
で一斉に近づいていった。

近づいてみてもなかなかその人は動こうとしない。だが、なかなか
顔はみえない。こんな妙な状況を吹き飛ばす出来事が起きた。

力チツ。

何かの音がした。その瞬間。

「あつー。」

音と声と同時に人影も走り出した。人影が走り出すと同時にみんなも走り出す。不審すぎる。。。

一体だれなんだろう・・・。こんな場所にいるなんて。。。

そんなことを考へてゐるうちに、僕らは既に学校の外にでていた。どうやら、学校の庭を越え、門を越え、

今日シェゾと会つたところまで来てしまった。しかし、人影を追うこととは結局は無の努力となつてしまつた。

「はあ、はあ、結局見失つてしましましたね。」

ルルーが息を切らしながら言つ。『うううとき、杖に乗つてゐるウイッヂが一番スピードを出せるよつて思えるが、

本人いわくあんまりスピードは出ないらしい、でて二十キロ程度とか。

「一体だれだつたんだ？」

闇の貴公子ともいわれるシェゾが言つ。だれもその問い合わせに答える事はできなかつた。

「でも、怪しい人ですわね。こんな時間に私たちのことを見ながらうろついているなんて……。」

もつともな意見だ。その時僕の頭には今日の朝の話がよぎつた。

まさか……。でもそんなことは考えたくもない。ましてや、人前に姿を晒すようなことはしないだろう。

「とにかく疲れた。」

一番何もしていないウイッヂが言つた。なんでウイッヂが疲れるんだろう……。

みんなと一緒に走つたらついてこれないんじゃないか?という疑問が起ころるかもしねりないが、

実はこうみえてもウイットチは体育の持久力の成績が上位なのだ。これでは文句のいいようもない。

とりあえず僕らは一休みすることにした。

ただでさえ人口が少ないスカイサーブシティでは、道の真ん中で寝転んでいても、邪魔扱いされる事はない。

幸いそのような人はいなかつたが、都會だと邪魔扱いされそうな形で僕らは留まつていた。

(みんなは真似しちゃだめだぞ。念のため。)

「あ、これなんだろ?」

物探し名人といつてもいいほど、よく落ちていいものを見つけるアーチャンはキヨトンと

可愛らしい目をパチクリさせながら言った。そこには・・・一枚の紙切れがあつた。

「ただの紙切れみたいだけ?・・・」

そつこつて僕は丸まっている紙を取り、中を開けてみた。

「これは・・・?」

どこかでみたことあるよ!つな…なんだろう…ああ!喉までかかるてこるのにもどかしい…

「楽譜じゃない?」これ。

僕の悩みを一瞬で打ち碎いた。その言葉が出てこなかつたんだよね。

だが、楽譜といえるほどちゃんとしたものではない。読めるかどうか微妙なものであり、ト音記号やヘ音記号のマークさえ書かれていな。

「笛といい、楽譜に似たような紙といい、なにか音楽と関連してるのはかな?」

今日初めて口を開いたのはチロ。見た感じ妖精っぽいけど、単に言えば可愛らしき女の子。魔法の数は多いらしいけどね。

「音楽といえば、パノッティ。あなたのこの楽譜読める?」

パノッティはいつも楽しそうに笛を吹いている男の子だ。だけど笛の上手なだけがいいか?といつとあんまり上手くない。。。

むしろボクのほうが上手く吹けそうだけだねー

「うーん、みたことないなあ・・・、仮に記号をつけたとしても読めないし・・・」

やつぱり楽譜ではないのだらつか?など笛が落ちていて、楽譜らしき物も落ちている。

つてことから関連付けるとやはり楽譜とこの結論にたどり着くような気がする。

うーん、なんだらか。この妙な違和感は。一回どこかで見た気がするけど、わからないかな。。。

「あれこれ悩んでもしょうがないわね。帰つまじょー!」

ルルーが元気よく言った。たしかにそうだね。。。悩んでもしょうがないしね!

少しもどかしさが残るもの、僕らは学校へ向かおうとした。だが次の瞬間、そのもどかしさはすっかり消えることとなる。

第3話・失うもの

もどかしさが消えたのは、たった一つの声から始まった。

本当にそれでいいのかな？

エッ？！みんなが振り向く。だれが今話しかけたの？だがここにいる全員は同じような顔をしていて、同じ疑問を抱いていた。

わざとその『声』は続く。

もはや帰る場所などない。君らはもうこの試練から逃れられないのだ。

「なつ、なにを言つてるの？！」

ルルーが思わず声に出した。すかさず、反応していく『声』

ルルーといったな。

その低く恐怖に満ちた『声』はルルーの足を止めさせる。見るからにルルーは何かに怯えているような感じだ。

確かに説得力のない発言だな。

その場にいる九人が凍りついていた。なにをすればわからないのと『声』の恐怖に縛られているからだ。僕も例外ではなかつた。

では、説得力を持たせてあげよつか。みるがよい。

それは、低い声から放たれた呪文であった。

ジガ・オル・ストリーム

その言葉を聴いた途端だれもが言葉を失つた。なぜかつて?だつて…

「学校が…」

「え、なんで……」

学校がなかつたんだもん。

目の前にあつたはずの学校が、跡形もなく消し飛んでいた。庭も校舎も。なにもかもが灰も残さず消えていた。

ククク、これでわかつたであろう。

「ふつ、ふぞけるんじゃないわよ！パワーストライク！」

パワーストライク。武道派の術の一つ。感情によって威力が異なる技である。ルルーの手から放たれたその呪文は勢いを増して飛んでいった。

無駄だ、今私は君らの近くにはいない。だが直に会えるだろう。

力一杯唱えた呪文は虚しく消えていった。

「クツ・・・。」

近くにいないのでうりやつて話しているかなんて、どうでもいいことだった。ただでさえ震え上がる僕らと比べ、ルルーはかなり勇敢

に行動している。

そして、アルル・ナジャ

「……エッ？」

不意をつかれた言葉に、どんな反応をしていたかは定かではない。

お前が来る日を楽しみしているだ。

「なつ、なぜ?..」

僕の問いには答えてくれず、声の主は闇のよろに消え去った。

「へつ、クソ!」

「……。」

嘆いたのはショゾ。だが嘆いたのは彼だけでなかつた。

呆然と立つてゐるチコ。今まで全く動搖を見せたことのないチコが、

「ここまで動搖した表情であつたことは、不安さえ抱いた。

今、帰るべき場所を僕ら失つた。どうしようもない・・・。

……

沈黙の空気が流れる。朝の楽しい時間がまるで嘘だったかのよう・・・。

「がつ……く……。」

小さな声を漏らしたのはチコであった。

「学校へ・・・。」

今度はせつときょうはつきり聞こえた。

「学校へ行きましょ。ここにても何もできません。せめて・・・。」

その後の言葉は大抵予測がついた。

「そうだな。ここに落ち込んでいても何も始まらないねえ。」

シユゾウが切り出した。まさしくその通りだ。まだ絶望感に浸るのは早すぎる。

「それぞれ思つてゐるがあると思ひますから……みんなで別れて行
きましょう。」

チコが再び口を開いた。

こつしてボクらは別行動をとることになった。それぞれ心配するべき場所に行こうとして、バラバラになつたわけだ。

ボクはルルーとチコと一緒に学校へ向かつた。ヨージ先生はどうなつたのだろう? 学校のほかのみんなはどうした?

そんな気持ちがボクにはあつた。だが、すでに何もない学校から僕の思つものを探すのは無理に近い事であつた。

「……恐ろしい破壊力ね……。」

何もなくなるということを初めて体験した気がする。僕は目から流れるのを我慢していた涙が溢れ出す。

「なつ、なんで・・・。」

だれも声をかける事はできなかつた。みんな同じ気持ちであつたから。目の前にあるはずのものがない。

大切な人がいない。こんな悲しみに耐えられず、ボクはその場でうずくまつてひたすら泣いていた。

チコモルルーも言葉を失い、目からわざかながらも涙を流していた。

「・・・。あの・・・、」

涙をにじませた声でルルーが言つた。

「あの笛や楽譜と...関係があるんじゃ...いいの?」

あの『てい』とかいてあつたやつか。確かに無関係とは思つにくい。

「その人が犯人じゃ...ない?わざと物を落として私たちをおびき寄せ、学校から遠ざけて、

ゲーム感覚で逃れられない選択を負わせたんだわ。そうとしか考えられないっ！」

考えてみればそうとも言える。この一連の騒動といい、何か前兆といつものが存在している。

奴は、ボクらの目の前で呪文を放ち、ことじごとく学校を潰した。帰る場所と大切な人を無くし、

しまいにはあざ笑うかのように去っていく。こんな行動を許せる？
許せるわけないでしょ。

僕らが拾った『笛』と『楽譜』はきっと重要な役割を担うに違いない。そしてかすかに見える『てい』の文字。

名前を示しているのであれば、その人に違いないだろう。

ふとみてみると、チコはなにかいいたげな顔をしていたが、同じ事を思っているのだと僕は解釈した。

僕ら九人は自然の流れで再び集まつた。これからどうするか？
いつことを話し合つために。

鍵となる要素は『笛』と『楽譜』。そして『てい』の文字である。
これらを総合して僕らが決めなければならないことは一体何なのか。

「これらについてなにか知っている人はいる?」

ルルーが仕切るように言った。だが、唐突に見つけた材料の詳細を知る人はいないのが当然だ。

「わかんねえな・・・。」

「さすがにねえ・・・。」

みんなが発する言葉は似たようなものだった。

「もしかして・・・。あの伝説の・・・。」

物知りのチコが口を開いた。

「伝説のティナ……さんのもの……？」

「ティナさん？」

みんなが同じ疑問を発した。伝説といわれても全くわからないし、ましてやティナさんなんて名前を聞いたことすらない。一体だれなんだろ？「ティナさんって」

「あの伝説の呪文を使用するティナさんです。フルネームは知りませんが……。『てい』がつく名前といったらそれぐらいしか思いつかなくて……。」

「なるほどね。でも伝説とされる人がこんな悪事を起しあとは思えないわ。」

「ああ、でも可能性はあるよな。」

どちらも正論……。うーん。どうなんだろう。

「でも、選択肢の一つとしては残す余地があるわね。ほかに知っている人はいる?」

ティナについては区切ったルルー。

「あとは知らなそうね。ならしょうがないわ。」

そういうて付け加えた。

「私たちの目標は的確よ。こんなことあるやつらを野放しに出来るわけないじゃない。」

「ああ、わかつてゐる。こんなことを平氣であるやつは俺も許さない。

「

「私もよ。」

「俺もや。」

みんなが同意する。もちろん、僕も異論などない。力の差は歴然かもしれない。けど、それを理由に引き下がる僕らでもない。

しかし一人だけ、賛成しているような顔をしなかつた人がいた。チコである。彼女は賛成の言葉も反対の言葉も述べなかつた。

だが顔を見る限り、彼女はなにか違う心を持っているのではないか？と僕は思つた。だが、そのことは僕以外だれも気づかなかつた。

「これからどうへいくのよ？」

「そうね……。」

ここスカイサークルシティは四つの街に囲まれてゐる。南にあるのが消えた街チューベンタウンがあとの三つは残つてゐる

。西に位置するのがリョウンタウン。東に位置するのがケッペルティ。そして北に位置するのが名の「トーホースタウンだ。

どの街にも行くのは簡単だ。道を歩いていくだけでつく。だがそこから外にでるとなると険しい道のりを歩む事になる。

ボクらはだれも行ったことがなく、その辺の知識はあいまいであったが、物知りのチコが言つた。

「その三つの街の外側は広くテイブの森で覆われているの。南のチコベントウンのさらにも南には川があるだけ。

そのテイブの森の抜けたところに、大きな城が一つあると聞いたわ。一つはギガ族の城なんだけど、もう一つは知らないわ。

最近の話だと、その一つは互いに戦争を繰り広げていたんだけどここ最近はさっぱり。

もしかしたらその城のどちらかが街を破壊させてしまったのかもね。

「

「なんで街を破壊する必要があるんだ？」

シェゾが聞く。

「それは自分の領土を増やしたいからよ。前まではどひらも互角の戦いだつたから、どつちも利益がなかつたわけ。

「じーじへんの街を支配すれば有利になるでしょ？南から攻めた理由は自分の城と挟むようにするため。

そうすれば威嚇行為にもなつて手を出しじーじへんなるからね。」

「どつちなんだ？どつちを俺らは倒せばいいんだ？」

「それは情報収集しないとわからない。けど、今の私たちのレベルで倒せるほど簡単な敵ではないと思つわ。

もつと力をつけて挑まないと私たちの目標も達成されずに終わるわよ。」

チコはずつとこのことを考えていたのかな？だからうかない顔をしていたのかな？それなら合点もいく。チコはこのことを思つていたのか。

「チコの仮説が正しいのならば次に攻められにくいノースタウンにいくのが妥当ね。」

ルルーが先陣きつて言つ。確かにそうだ。自分たちが一つの城に向かうためには通らなければならぬ道もある。

「では、ノースタウンへ向かいましょう。」

ウイッチの言葉についていくよに、みんながノースタウンへ足を運び出そうとした。そこで思わず言葉が出てきた。

「待って。」

そう言ったのはチーフであった。そればかり感じていた有耶無耶感が一層増していく。

「どうしたのよ？」

ルルーが問いかける。こいつは時のルルーは言葉にできないうまでも怖い。僕なんか多分言葉も出ないだらう……。

「わたし……、いけないわ。」

急な出来事であった。今になつて行けない？なんですか？

「どうしても行けない理由があるの。」

「なによ？」

ルルーが一際怖く問いかける。チコは怖いのあまり、震えだした。

「こいつ、言えない……。」

「なんですよ？あなたさつきから変よ？みんなの意見に賛成している
わけでもないような顔してるしね。」

僕以外にも見抜いている人がいた。チコがなにか思いつめていたこと。

「『じつ、『じめんなさい。』どうしても言えないの……。』

チコの目から涙が溢れて出した。ルルーの威圧感に耐えられないの
であるづ。

その時であった。ボクらはとんでもない光景を見た。

「えつ？」

みんな疑問に思つた。なぜつて？

チコの体が次第に足のまづから消えていくのだから。

「えつー！待つてよー！」

ボクの叫びはチコにも通じた。けだしチコは涙を流しながら消えていった。

第4話・一人目

チコが消えたという出来事はボクにとっては重すぎた。チコの思つていた本当のことを見き出したかったのだけど……。

一体全体なぜチコは消えたのか、訳のわからないままボクらはまた立ち廻していた。学校が消え、今度はチコが消え……。

一日でありえない出来事が二つも起きた。僕らが通常でいられるはずがない。

「なんで……今度はチコが……。」

みんな同じ疑問を抱いていた。あの優秀で物知り、そしておとなしい性格のチコが派手な演出で消えていった。

それはボクらにとって相当なダメージを意味する。これから城に乗り込もうとする今、大事な戦力を失いてしまった。

それ以上に、親友のチコが行方不明になってしまった。

「…………。」

シェゾの言葉を最後に全員がまた沈黙していた。そこにルルーが切り込んだ。

「このようなことが今田はほかにも起つるかもしないわよ。今日をいつもの感覚で過ぐさないほうがいいかも。

チ「がいなくなつたのは悲しい出来事だけ、それに立ち向かわなきや次に進めないわよ。」

・・・・・。

でも、やつぱり。

そんな言葉が出ると思つてた。むしろ、ボクがそのような言葉を言

いたかつた。

「そうよね・・・。」止まつてしゃ意味ないよね。「

「ウイッチがルルーに続いて口を開いた。その言葉をきいて、みんなも賛同する。

「やうだな。ここで挫けてちゃ前にすすめねえ。城のやつらを倒すこととチコを取り戻すこと。その一つが今必要なんだ。それに向かって戦おうじやねえか。」

シェゾが勇ましく言つ。うん、ボクもこんなとこひで挫けてちゃだめだ！次に進まなくちゃ！

八人という集団行動で街に向かう。なんて奇怪な光景だが、人通りが少ないせいか、案外気にならない。

「

鼻歌交じりで歩いているのはアーチちゃん。学園的アイドルとまではいわないが、

作者みたいな小さい子ファンの人にとってはたまらないキャラクターであろう。ちなみに作者はロリコンではない。誤解しないように。元々、さきほどは気にならないとはいつたけど、こうしてみて見ると本当に変な集団だなあ・・・。

白いマントを着用する白髪とやけに勇者じみた服を着る剣士。ホウキに乗る魔女に、鼻歌交じりの『』子。

そして威圧感ムンムンの武道家に音楽家のチビ。そして人魚に似ている女の子が一人に僕つと・・・つながりがなにもない気がするけど・・・。

「あれがノースタウン?」

十五分ほど歩いて見えてきたのは、なにやらなにもなによつにみえる街、といつより村であった。

「なにか壊さなくても壊れているような街ね・・・。」

それほど質素な感じがする。本当に人などいるのだらうか？こんなところに。

「よし・・・この村を抜ければ・・・。」

「じゃあ、グループにわかれて情報収集をしましょ。なにも知らずに突っ込むのは馬鹿のやることだわ。」

シェゾの言葉にグサッと一撃ルルーの言葉。シェゾ・・・。たまには落ち着いつよ。

「じゃあ、適当に決める？」

ボクが質問したのが間違いだった。なぜなら

「俺はアルルがいい。」

でたよ・・・ショゾの名前。このストーカーめ・・・。

「じゃあグーチョキパーでわかれましょ。それが公平だわ。」

ショゾがやけにボクに視線を送つてくる。同じのをだせつてこと・・・
・だろ?。あいにくボクに心眼や心理学の心得などまったくないの
で、

そのような熱い眼差しで見られても反応に困るんだが・・・。

「せーの、グーチョキパーでわかれましょ。」

はい、即決。

ここにグループが決まる。

グー組・・・シェゾ、ラグナス、パノッティ。

チョキ組・・・ウイツチ、セリリ。

パー組・・・アルル、アーチャン、ルル。

「ぬあつ。なぜアルル！貴様グーをださん！」

はいはい、そのくらいにしておいて。恨むならじゃんけんを開発した人を恨んでおくれよ。

「じゃあ、このグループでそれなんでもいいから情報を集めてくれる」と。いい？今日までならまだOKだからね。」

ルルーがそいつて、三グループはそれぞれ別の方向へ歩みだし、情報を集めることにした。

こちらはグー組こと男子グループ。彼らは誰も社交術を持つていない。いや、持てないというべきだらうか。持てたら持てたでなにか恐ろしいけど…。

「何を聞くつが？」

白髪の剣士が聞く。

「まずは城の「」とじやね？」

黒髪の剣士のラグナスが答える。

ラグナス・ビージャン。剣を中心とする子供の魔導師。普段は子供だが力がたまると大人になるいわば変態動物。ちなみに今は中間である。

「そうだな。で、誰が聞く？」

「そりゃもうパノッティやオレが聞けるわけないんだからさ。」

白髪の剣士の方を一人が見る。なんとも言えない目で。

「・・・？」

白を切つているわけではない。ただ『ドンカン』なだけである。

「君でしょ。シェゾくん。」

二人の顔が微笑む。最初からこれが狙いか?『こいつらめ…。二人は本当に楽しそうに微笑んでいる。しううがない。俺が聞くしかないのか。

「さて、まずどこからあたるつか?」

「ここで選択肢。

- ・住民
- ・学校
- ・道行く人

「どれがよいだら?」。多数決をとつてみた結果。

・学校

一票

・道行く人

一票

・住民

一票

さて困った。

「全部あたつたら?」

笛を吹きながら簡単に言う。まあ、結論から考へるとその通りだ。今どこかに行けなければならないといふことはないし、情報は多いほうがいいからな。

「そうだな、じゃあまず道行く人に尋ねよ。」

というわけで道行く人に聞き込みを開始したわけだ。まるでテレビアナウンサーのような気持ちだな……。って、アンケートの意味ね

えよ！

「すみません、ちょっとお伺いしたいのですが。」

意外にもシェゾは丁寧な口調で聞く。社交術を持っているじゃないか。と感心でしたが、どうやら間違っていたみたいだ。

「えーっと、そのですね。…………で、つまり…………なわけで……。」

これほど説明が下手な人は初めて出会ったかもしれない。と聞かれた人は思つただろう。

「すまん、わからねえ。」

聞かれた人はだいたいこのような返事をくれた。無理もないだろう。このようなチグハグな質問では。

何人かに聞いているがさっぱり情報がつかめない。言いたいことが上手く表現できないこちらの責任もあるが。ってかそれしか考えられない。

「通りすがりに聞くのはダメだな。」

ダメだなつてあなたの責任なのに……しょうがないか。

「じゃあ住民に聞こうか。」

「ちょっと待った。シェゾ。」

止めに入ったのはビジャシ。

「聞こうとする内容を決めよう。でないといつまでも回じーとの繰り返しだよ。何を聞きたいのか絞りみつい。」

おお、ラグナスが初めてまともな意見を述べた。ラグナス本人も意外であつたみたいだが、その証拠に発言した後は何やら浮かない顔をしている。

「そうだな、で、何を聞く?」

珍しく肯定的なシェゾ。いつもなら反抗するのに、この事件は重かつたらしい。シェゾ本人の性格を変えてしまつとは。

一方でシェゾの問いかける内容が考えられないラグナス。パノッティも考へているようだが、あんまり期待できそうにはないようだ。

「一いつの城の」「と、

ラグナスが言う。最もな意見だ。こんな状況では一つでも多くの情報があれば何よりだ。

「他には？」

「うーん、そうだね。デイブの森のこととか？」

「つむ。やうだな。女の子にこての……。」

「ダメ。」

一蹴。

それからオレらは住民に聞くことにした。まず、住民を探さなくては…。通りすがりの人はいるのに、なかなか家といつものがない。

ここノースタウンは本当に街なのか？なんとなく奴らが狙わない理由もわかる気がする。ここを狙つてもあまり得がなさそうだしな。

とつあえず少し歩いてみた。何もないとはいって、歩いてみるとな

なか広い。『うわや、あいつが俺らがいたところは何かの広場のようだ。

広場から離れてみると、やはり住むと思えるものが見えてきた。

「うわ……。」

思わず声に出したのはシェゾ。なにやら想像していた『家』とは違
い……、うーん、これが家か？ 見た目最悪なのが……。

よくみてみればとインターホンがない。つまりこの街の家では、外
から声で呼びかけなければならぬのだ。

これは案外恥ずかしいことについては常識知らずの二人もわかつて
いた。

「ええい、惱んでも仕方ない！ いくぞー！ ラグナス、パノッティ！」

……聞き込みはシェゾに任せることにする。つまり『路上で大声をだす』
のだ。

「あの、すみません。」

まじですか、シェゾくん。シェゾが話しひ出した瞬間、ラグナスとパノ
ッティは打ち合わせでもしたように逃げ出し……、

「ちょっとお伺いしてもよろしいですか？」

続けて聞くショゾの両手にはしつかりとラグナスとパノッティの姿があつた。読みはショゾの方が上だったみたいだな。

とまあ、道行く人に聞くのと変わらない言葉遣いで大丈夫であろうか。そしてなんといつてもボリューム。

周りに人がいないからまだいいが、普通じゃ考えられない。ここのは住民はいつもこんな感じなのかな?とにかく返事が心配である。

しかし、ここのは住民は慣れたようにあっさり返事をくれた。

「はーい。」

中から出てきたのはかなり太った俗に言うオタクフェイスの男性。ではなく、正反対なかわいららしい女性一人であつた。

女性というよりは見た感じ年頃は変わらない女の子といふ気もするが。

「ショゾくんとラグナスくんとパノッティくんだよね?待つていました。」

?

三人の頭の上についた記号である。

「エッ? 何で……。」

といひかまわず彼女は話し続ける。

「どうぞ中にお入りください。話は中でしましょ。」

いきなりそんな勧誘に乗せられても……と思つのが当然である。無論
ここに『当然』や『常識』といつものがあれば話だが……。

つまり

彼らは彼女の家へと入つていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2647d/>

Chase Dream

2010年11月16日11時02分発行